別紙

平成２９年度新規市指定文化財

【彫刻　木造 梵天・帝釈天立像　２軀】　円覚寺蔵

制作年代：南北朝時代

像　　高：梵天 144.8 ㌢　帝釈天 140.7 ㌢

円覚寺仏殿内の須弥壇上に本尊宝冠釈迦如来坐像（市指定文化財）と共に安置されています。いずれもヒノキとみられる材の寄木造りで、梵天は手に香炉を持つような姿勢を示し、帝釈天は円頭に冠帽を被っています。当初より一対で制作されたと思え、作風から南北朝時代14世紀後半頃の作品と考えられます。また、梵天が香炉をとり、帝釈天が冠帽を被って合掌する姿は、中国南宋時代の中国画に描かれた図像とも共通します。

これら２像は鎌倉でも珍しい中国風の作例として、さらには、南北朝時代鎌倉地方の特色ある作風を顕著に示している点で貴重です。なお、仏殿内にて拝観できます。

【古文書　紙本著色　鶴岡御神領 往還 幷谷々小道分間図　１舗】　鶴岡八幡宮蔵

制作年代：江戸時代

寸　　法：縦 300.0　横 414.0 ㌢

鶴岡八幡宮の「御神領」を中心とした江戸時代鎌倉の往還路や、谷戸、小道について描いた大絵図です。縮尺は正確で、鶴岡八幡宮がほぼ中央に配され、そこから海岸へと連なる段葛が描かれています。朱線で囲まれた範囲が「御神領」と思え、この朱線内には江戸時代の鶴岡八幡宮の支院である十二院の位置がしっかりと書き込まれています。

また、本図は谷戸の様子を地名とともに詳しく描き、樹木の形や文字の筆跡・癖などは、嘉永四年(1851)の「英勝寺境内絵図」に酷似していて、江戸時代後期の作であることは確かです。本図は制作された理由や経緯は不明ですが、広い範囲に谷戸や道筋を詳細に描いた、鎌倉では他に類例をみない絵図として貴重です。なお、通常は非公開です。

【歴史資料　荏柄天神社詩板　１枚】　荏柄天神社蔵

年　　代：江戸時代

寸　　法：縦 29.1　横 215.6　厚 1.6 ㌢

荏柄天神社の神前に梅の木を植えたことを祝って、鎌倉五山の禅僧たちから寄せられた、天神の徳を称賛する七言絶句の詩を板面に陰刻したものです。前半部分を欠失しています

が、同社に寛永十八年（1641）の同詩板の写が伝来し、また、貞享二年（1685）成立の『新編鎌倉志』の記事によって欠損部の内容を補えます。本詩板は詩を寄せた禅僧たちの活躍年代から、室町時代の応永年間（1394～1428）にその原形が成立したと推定され、さらに、応永のはじめ頃には天神様（菅原道真）が中国に渡って禅を学んだという渡唐天神伝説が存在したので、詩板の内容は禅僧らの厚い天神信仰を伝えた、とくに早い事例と考えられます。

本詩板は、江戸時代に旧詩板を忠実に転写したものと思われます。詩板として制作した理由は不明ですが、禅僧の詩板のうちで神社に伝来した例としてきわめて稀であり、現存する『東漸寺詩板』（横浜市東漸寺蔵）や『徧界一覧亭記詩板』（瑞泉寺蔵）等とともに、数少ない史料としても貴重です。なお、本品は現在鎌倉国宝館で保管され、随時展示されています。